
時の沈黙

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の沈黙

【Zコード】

Z6323E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

その日、ぼくのクラスにミステリアスな雰囲気が転入生がやってきた。その彼女がやつてきたことで、ぼくの周りが一変することとなつた。

その日、ぼくのクラスに転入生がやってきた。

その転入生は女の子で、髪は長髪、常に警戒をしているような鋭い目つきをしており、ミステリアスな雰囲気をかもしだしていた。彼女は、先生に続き自らの自己紹介をした。

「鈴木れおなといいます」

彼女は、先生の紹介に続き自己紹介を始めた。その声は冷静かつ冷酷であるが、人を引きつかせるような声をしていた。彼女の歩き方は優雅で、それは人々を釘付にした。

ぼくは彼女のその雰囲気に魅了されたと思っていた。実際、その雰囲気は前述どおりミステリアスなのだが、そのミステリアスさにぼくは惹かれた 魅力されたのだ。

ある授業中、三席はさんだ向こうにいる彼女をふつとみていると、授業中でもその雰囲気は健在だった。背筋をピンッと伸ばし、体は完全に前へ向いている。それは、厳重な面接試験でも通用するような完璧さだった。

彼女をそのままみていると、突然彼女はこちらを振り向くと、ぼくと彼女の目があつたので、ぼくはあわてて視線をそらした。だが、視線をそらしてもそれからが気になり、ゆっくりみてみると彼女はこちらをまだ見ており、ぼくが見たのに気づくと微笑して、ふたたび前を向き、それからこちらを向くことはなかった。

ぼくは、クラスでも影の薄い人物であることを告白しなければならない。大概の影の薄い人物というのは、友達は多いとはいえないほうであり、引っ込み思案 内気である。ぼくもその例外ではなかった。そのため、れおなさんのことについて話す人もいなかつたし、話せもしなかつた。

そんなぼくには、さらに致命的な点があり、勉強ができないし運動も苦手という、一番悪いパターンの人間だった。とうぜん、成績

も悪いため課題が多く出されるし、それを解くのに時間がかかるのも理解に難くないだろ？。よって、いくら時間があつても、それが解けないときもあるし、解けても自分のやりたいことの時間などは取れない。

そんな人間が思うことはただひとつ 時間がとまればいいのに。

だが、それは気休めにもならぬいたま」と同然であり、事実そんなことはありえないことなのだ。よくいうではないか、時間は平等に与えられている、と。

そんな気休めにもならない[冗談を考えつつも、その日も課題に追われていた。

ぼくの家の前には大きな道路があり、いつも騒音を立てている。勉強がただですらできないのに、騒音で邪魔をされれば、課題を取り組むのにも嫌気がさす。そうなればもうこの日は終わりで、課題に取り組むのを投げ出した。そのとき、ふと頭に浮かんできたのがあの転校生 れおなさんのことだった。

彼女は、とにかく謎だらけだった。転校生といえば、最初のほうはいろんな人に声をかけられるものであるのに、彼女はその例外にあたつた。もちろん、例外にあたる人もいるが、彼女はそんなタイプではないから、不思議だつた。その雰囲気がそうさせたのかもしれないが、誰か一人ぐらいは話しかけるだろう。

それと、授業中彼女がぼくを見ていたこともそうだ。前述どおり、ぼくは影が薄い人間であるわけだし、彼女がぼくを見つけるということは、あるいまい。もし、一億年に一回というほどの奇跡が起きたというなら話は別だが。彼女は、ぼくを見て微笑した。いつたい、彼女はぼくをどう見て取ったのだろう？

ほかにもたくさんあつたものの、数を上げればきりがない。次第に、勉強のことなど忘れ、眠気が差ってきて、そのまま床に就いた。

その朝はいつもと違つた。

そう、寝起きのぼくですら、その雰囲気が何かいつもと違つことだけは悟ることができるのはだから、明々白々であり、寝起きが直るとすぐさまその雰囲気の違いに気づくことができた。

その異様な雰囲気に、ぼくは呆然としていていつたい何が起つているのかと、脳内をめぐらしたが、ふと我に返り、学校にいかなければ、普段はいつも最初にみる時計をみた。アナログ時計だったが、その針の新は動いていなかつた。

次に音がしなかつた。家の前には道路が通つてゐるわけだから、いつも騒音がする。早朝だからといって、それが覆されたためしば事故が起きたとき以外まったくなかつた。その事故のときですら、パトカー やら救急車やらの音がするから、結局は騒がしかつたのだが。だが、この日はそれもしなかつた。

ぼくは、窓を開け、外の世界を見てみた。道路にはたくさん車が走つてゐるにもかかわらず、動く気配なく、その場で止まつてゐる。空を仰ぐと、朝日は昇つてゐるもの、その傾き加減は朝をあらわしていて、まだ陽射しは弱かつた。また、木をみてみると、風に吹かれ落ちた葉が、空中で静止画のようになつてゐた。

時計が止まつており、音がしない。物体の動きも止まつてゐる。それが示すもの。それは、何も動かない世界 無音の世界 いや違う。時が進まない世界だ。

そう、ぼくは時が進まない世界に來たのだ。

ぼくは、その感じがなんともいえなかつたが、不意に机に視線が移り、まだ終わつていない課題のことを思いだした。

「そりいえば、昨日、時間が止まればいいのに、つて思つてたな…
…。ちよつどいいや、この時間にやつてしまおう」

表面上はうれしそうにしていたぼくだが、内心はまったくうれしくなかつた。時間が止まつてれ、と願つたのは事実だが、實際こうしてみると虚空感に襲われるのだ。孤独 いつも一人でいる時間が多いぼくは、孤独になれてはいるはずなのに、この虚空感を受け孤独がこんなにつらいものだとは思わなかつた。

だが、それは内心であつて、やはり表面上は喜んでいたに相違ない。ぼくはるんの気分で、課題を終わらせた。

再び、外を見てみた。車の位置、太陽の位置、葉の位置、すべてが課題をやる前と同じだった。

誰もが一度は時が止まつてほしいというときがあつたに違いない。それは貧乏人やぼくのような人は、何度も考えただろう。そして、もし止まつたら何をするか、ということも考えただろう。

それが今、現実となり、完全に時が止まっている。いつたい何をするだろう？

ぼくは最寄の本屋さんへ行つた。まだ朝だから、開いてはいなかつたものの、裏口で知つている人物は従業員だけだろう、というほどわかりにくい。店を一周していたらまたまみつけた。非常口は鍵が開いていたので、ぼくはそこから店内に入り、読みたかったマンガを手に取つた。そして、マンガについているビニーールを取ると、上のほうをとるための足置きにすわり、その本を読み始めた。それを幾度となく繰り返し、ついに読みたい本もなくなつたので、本屋を立ち去つた。

本屋を立ち去ると、今度はどうしようかと考えた。時間が止まれば好きなことができる。今までやりたてもやれなかつたことをやることができるのだ。それに期待を高め、次の場所へと向かつた。

だが、やればやるほどぼくの心はむなしくなる一方であつた。

確かに楽しいことは楽しい。やつているときはそう思うのだが、いくらかやつた後、すぐにそれが楽しくなくなつた。たとえば、対戦ゲームをやつていてるとしたら、最初のころは強くてコンピュータでも倒せないものが、慣れてくると、コンピュータで弱くてつまらないとなり、必然的につまらなくなつていくものである。そこで、対戦相手を作り、友達同士でやるわけだが、今このときの現状を考えると、それは不可能なことだった。

ぼくはまたあの虚空感にみまわれた。前に受けた虚空感と違い、今度はかなりの重圧をかけてきており、それを受けたまま、ぼくは

やりたいことをやり続けた。

結論から言おう。ぼくは発狂した。

誰もいない 頼れない 静か 動かない 何もかもがいやになつた。もうこんな世界はいやだ！ 早くもとの世界に戻してくれ！ そう叫び続けた。だが、誰も返事をしない。いくら話しかけても、このぼくのこのときの状況を理解してくれる者がいな……。

誰か……誰か。誰か！…………。

「いかがですか、この無の世界は？」

不意にぼくの耳に、自分のものではない、他人の声が入り込んできた。ぼくは、その声のほうにせつとすばやく振り返った。

そこには、白く輝き、銀色となつていてる服に包まれたれおなさんの姿があつた。

「れおなさん……」

「いかがですか、この無の世界は？」

「いつたいどういうことだ？」「

「あなたが望んだこと。それが、この無の世界」と彼女。「あなたが望んだこの世界、どうです？ あなたを喜ばせましたか？」

「喜ぶも何もあるものか！」ぼくは怒鳴るようにいった。

「あなたが望んだ世界にもかかわらずですか？」

「望んだ世界だろうがなんだろうが、こんな世界は真つ平だ。元の世界に戻してくれ！」

「あなたは何度となくいつっていたはずです。時間が止まればいいのに、と。なぜ、あなたが望んだ世界をあなたが喜ばないのでですか？」

「喜べるものか。こんな……こんな……こんな世界のどこが楽しい！」

「こんな世界は、地獄の世界だ！ 喜ぶも楽しいもない！ とにかく、元に戻してくれ！」

「おや、この世界の創造主は誰かわかつていますか？」

「そんなもん誰だつていー！ とにかく、」

「このとき、彼女はぼくのことばをさえぎつた。

「わたしですよ、この世界の創造主は！」　彼女の目が人を殺さんばかりの鋭さに変わった。「あなたはいつもいつっていた。時間が止まればいいのに、と。わたしはあなたの願いをかなえたい一心で、この世界にやってきて、そしてこの世界を創造した。それをなぜ、踏みにじる？」

「もうこんな世界はいやなんだ！　こんな孤独で　つまらない世界なんて！」

「ぼくの母は必死だったに違いない。彼女はその鋭い目を弱めた。ならばいいだろ？　その声は冷静だった。「元の世界に戻す」

「本当か？」

「本当にこの世界に未練はないのですか？　あなたが望んだこの世界に。ここで捨てれば、私はいくらあなたのためにといえど、この世界をもう一度作り出すことはない」

「それでもいい。だから　」

そのとき、彼女の体から一気に強い光がもれ、ぼくの視界をさえぎり、言葉をじきらせた。それと同時に、ぼくに強力な眠気に襲われ始め、どんどんと意識が薄れていった。光が、どんどんさえぎられ、闇に包まれていく…………。

そのとき言葉が聞こえた。「……さよなら……」それを聞いたと共に、ぼくの意識はなくなり、完全に闇に包まれた。

車の騒音がする。忙しく走り続ける、車の音が。ぼくはその音で、起床した。

不思議な朝だった。前の起床したときの感覚ではなく、なんかというか　ある種のカルチャーショックのような感覚。そのまま一、二分は起床した状態でいたと思う。やつと現実に戻つてくると、自動的に頭の向きが時計に移動した。

時計は、カチカチと音を立てて動いていた。

「元の世界に戻ってきたんだ……」ぼくはそれをみてつぶやいた。

学校にいくと、ぼくの二席はさんだ向いの机には誰も座っておらず、先生も触れず、授業が始まつてからも触れられなかつた。また、友達間の話題でもその席について、これといった話題は持ち上がらず、それは何週間にも及び、ついに一ヶ月もその席は空白のままだつた。

ぼくは、それをいぶかしげずにはいられなかつた。あの日　ぼくが時が動いていない、彼女が言つ無の世界から帰つてきた日以来、彼女は学校に来ていないのだ。もしかして　ぼくはくだらない空想じみたことを考えた。

だが、それからずつとその空想じみた考えが、覆されることはなく、ついにぼくは、彼女はどうしたのかと、先生に尋ねることにした。

ぼくは、遠まわしない方をせず、单刀直入に、わかりやすく前もつて考えておいた言葉で先生に尋ねた。すると先生は言つた。

「鈴木れおな？ 誰だい、それは？」

ぼくの空想を見事に的中させる返事だつた。

ぼくは、前にこう前述した。『一億年に一回といつほどどの奇跡が起きたというなら話は別だが』と。まさにそれが　いや、それ以上出来事が、ぼくの目の前で、起きたのだった。

彼女はいつたい何者だったのだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323e/>

時の沈黙

2010年10月8日15時15分発行